**B-２　「効果的な支援のヒント」**

　不登校対応で，なかなか思い通りに状況が進展せず，次にどのような支援を行えばよいか分からなくなったことはありませんか？また，何とか本人に前向きな変容が見られるようにという思いで，考えられる支援を講じるものの，なかなか児童生徒の変容につながらず，支援に行き詰まったことはありませんか？不登校児童生徒に変容が見られない場合，どのように考え，どのように対応すればよいのでしょうか？

**（１）考え方 ： 「責めず，焦らず支援を継続する！」**

　不登校対応で進展が見られないと，「自分の担任としての力不足で不登校に対応できていないのでは」「他の先生ならうまく対応できるかもしれないのに」と思い，焦ったり落ち込んだりする先生もいるかもしれません。また，考えられる支援策を講じても不登校児童生徒が登校復帰しなかった場合，どうしたらよいのかと思い悩むこともあると思います。

　「もっとよい支援はできなかったか」など，自分の担任としての対応を振り返ることは大切です。しかし，後悔や自責の念にかられると，心のゆとりもなくなってしまいます。心のゆとりがなくなると物事を柔軟に考えられなくなったり，解決を急いでしまったりするなど，好循環が生まれにくくなります。「こんなに自分が頑張っているのに，どうして変わらないんだ」と本人に対してイラ立ってしまうこともあるかもしれません。しかし，教師以上に本人は「どうして自分は学校に行けないんだ」，「どうして学校に行こうとすると体が動かないんだ」と苦しんでいるかもしれません。その本人の思いに気付き，受け止め，寄り添うためには周囲の大人の心のゆとりが大切になります。

　また，家庭では，不登校児童生徒を心から心配しているはずです。教師も本人も保護者も，全員が頑張っていても，うまくいかない時もあるものです。本人が変わっていくためには，どうしても時間が必要な場合もあります。そんな時は，本人とのつながりを大切にし，焦らず支援を続けていくことが大切です。では，どういった支援が可能なのでしょうか？

**（２）対応策 ： 「本人の小さな変化を大切にする！」**

![C:\Users\long110\AppData\Local\Microsoft\Windows\Temporary Internet Files\Content.IE5\DY874UA3\wave-545128_960_720[1].jpg]()問題解決の考え方の一つに「解決志向型アプローチ」というものがあります。そこでは「変化は絶えず起こっており，そして必然である」と「小さな変化が大きな変化につながる」という考えが示されています。

一つ目の「変化は絶えず起こっており，そして必然である」という考えは，人は絶えず変化していて，その絶えず起こっている変化に気付くことが大切であるというものです。不登校対応においては，一人一人に対する支援の在り方や進み方は異なるはずです。支援を通して，分かりやすい変化を見せる児童生徒もいるでしょう。一方で言葉や表情には表れなくても，教師の関わりを嬉しく思っている生徒もいるかもしれません。目には見えない変化が起こっている可能性があるため，何かが変わっていると信じて本人を支えていきたいものです。

二つ目の「小さな変化が大きな変化につながる」という考えは，池に小さな石を投げた時にさざ波が広がるように，小さな変化がやがて大きな変化につながることを意味しています。ですから，実際の支援においてもほんの小さな変化を見逃さずに，その変化を本人の成長につなげようとすることが大切です。いつ，どんな時に本人が前向きな言葉を発したり，笑顔になったりするのかなど，児童生徒の様子を丁寧に観察するようにしましょう。そして，その小さな変化を教師や保護者等，周囲の人たちと本人が確認し合いながら，前に進んでいくことを大切にしましょう。

不登校の最終的な解決までは時間が掛かるかもしれませんが，小さな変化はいずれ大きな変化につながります。本人の「自立」を見据えながら，その時の本人の状態に合わせて，その時にできる最善の支援を行っていきましょう。

目には見えずとも，たった一つの教師からの声掛けや，あるいはたった一つの成功体験で，その後の児童生徒の人生そのものが大きく変わることがあるかもしれません。“小さな変化”を大切にして，本人に寄り添った支援を講じていきましょう。

**～ま　と　め～**

**①　不登校対応が進展しない状況でも自分を責めず，焦らず支援を継続しましょう！**

**②　児童生徒は必ず変化すると信じ，支援に当たりましょう！**

**③　児童生徒の“小さな変化”に気付き，少しずつ大きな変化へつながるよ**

**うに“小さな支援”を大切に行っていきましょう！**

③

**参考文献：「ワークシートでブリーフセラピー」（黒沢　幸子　ほんの森出版　2012）**